

むかし、二十三夜の晩は、親せきや村の人たちが集まって月をおがみながらにぎやかに食べたり飲んだりして、お祭りをしたそうです。

あるとき、ある家で、二十三夜のお祭りをしていました。すると、ひとりの物乞いが、やぶれた着物を着てやぶれたかごを背負ってやって来ました。そして、

「これはこれは。みなさん、お祭りをなさっているのですか。わたしもいっしょにおがませてもらえませんか」といいました。主人は、

「どうぞ、いっしょにおがんでください」と答えました。すると、そこにいたふたりのお客が、

「こんな物乞いなんぞ、いっしょにおがませてはいかん」と反対しました。主人は、

「いやいや、物乞いだって同じ人間だ。そういわずに、どうかおがませてやってくれ」といいました。ふたりのお客はだまってしまいました。物乞いは喜んで、手足を洗って上にあがりました。

やがて、二十三夜の月がのぼりました。主人はお神酒やお供えのだんごをみんなに回して、みなで月をおがみました。

祭りが終わると、物乞いは、

「こうしていっしょにお月さまをおがんで仲間になったのです。つぎの二十三夜は、わたしの家で祭りをするので、みなさん、どうぞ来てください」といいました。そして、そのときは使いの者をよこすからといって、帰っていききました。

さて、つぎの二十三夜の晩になると、ほんとうに使いの者がやって来ました。そこで、主人とあのときのふたりのお客が行くことにしました。三人が使いの者について行くと、高い山に着きました。こんな所にも家があるのかと思っていると、使いの者が、

「さあ、ここです」といいました。そこには、たいそうりっぱな屋敷が建っていました。

三人が座敷にあがると、このあいだの物乞いが出てきて、

「さあどうぞ、みなさんは、ここでゆっくりお茶を召し上がっていただきます。わたしはお料理をこしらえて来ますから」といって、台所へさがりました。

ふたりのお客は、

「あいつは、料理をこしらえるといっているが、いったいどんな料理を作るんだ」といって、こっそり台所に行き、障子に穴を開けてのぞいてみました。すると、たいへんなことに、物乞いが、まな板の上に赤ん坊をのせて、血をたらたら流しながら料理をしていました。ふたりはびっくりして座敷にもどり、

「ちよつと、小便をしてくる」といって、主人ひとりを残して逃げ出しました。ところが、あまりにあわてていたので、門の所でけつまずいてたおれ、石で鼻を打って、なんとふたりとも死んでしまいました。

いっぼう、物乞いは、できた料理を運んできて、主人に、

「これは、ニンジュといって、並の人間には食べることのできないめずらしい魚です。

どうぞ、たくさん召し上がってください」といいました。

主人は、いろいろなごちそうをいっぱいいただきました。

月がのぼり、主人が帰るときになると、物乞いは、刀を一本くれていました。

「じつは、わたしは、二十三夜の月の神です。お帰りになるとき、門の所にふたりの男がたおれています。けっしてふり返って見てはいけません。先へ行くと、天地をつなぐ大きな柱が三本立っています。これは、シチという妖怪です。そのシチの風上にまわって、まんなかのシチをこの刀で切りなさい」

主人は、いとまごいをして帰っていききました。門の所まで来ると、ふたりのお客がたおれていましたが、見向きもせず歩いていききました。すると、黒と白と黄色の三本のシチが立っていました。主人は、風上にまわって、まんなかの黄色のシチを刀でハシッと切りました。そのとたん、黄金が、ガラガラと、主人をうめるくらいたくさん落ちてきました。

主人は黄金を持ってかえり、大金持ちになったということです。

おしまい